

「セルフ・ポートレート」の可能性について

——「自己」「像」「同一性」とは別様の、松井冬子の作品を例に

遠山いずみ

目次

プロローグ：現代の「セルフ・ポートレート」、はじまりまでの、(状況)

生活の中の「セルフ・ポートレート」

「セルフ・ポートレート」の機能：澤田知子の作品を通して

(副論1. パスポート写真と「アイデンティティ」)

アイデンティティにおける「一致」と「らしさ」

「セルフ・ポートレート」の変遷

「セルフ・ポートレート」の破綻？

本稿の内容

* 副論1. パスポート写真と「アイデンティティ」

パスポート

ICパスポート、バイオメトリック・パスポートの導入と現状

ICパスポートにおける顔写真

「プレパラート」

バイオメトリック・アイデンティティへの問い

パスポート・証明書写真再考

無限変容／自分への収斂

証明書における顔写真の要／不要

個人の特定・判別から自分らしさの確認・呈示へ

I “「アイデンティティ」としての「セルフ・ポートレート」”をめぐって、(先行研究と紋体設定)

1 “「アイデンティティ」としての「セルフ・ポートレート」”？

“「アイデンティティ」としての「セルフ・ポートレート」”

「セルフ・ポートレート」の問題

2 これまでの考察1

キーワード：欲望・消費とシミュレーション

個性化と自己規定に基づく「本当の私」とハイパーリアル

(副論2. J.ボードリヤールによる「個性」)

欲望・消費システムとハイパーリアルにおける考察の瑕疵

欲望・消費のシステムにおける「セルフ・ポートレート」と再考すべき点

3 これまでの考察2

キーワード：「自律的肖像」とインターフェイス

「自律的肖像」、主体の構造とインターフェイスとしての肖像

主体の構造とインターフェイスによる考察の瑕疵

主体の構造とインターフェイスとして見た「セルフ・ポートレート」と再考すべき点

4 方向性

従来 of 考察を越えるために

問題の捉え直し

考察の手がかり、キーワード

可能性の兆し

*副論2. J.ボードリヤールによる「個性」

捏造された「個性」

「個性化」ゲーム

II 像へ／像から

1 自分であるものとしての像

「自我一像」

あるべきもの—あるはずもないもの

2 サイバースペースとアナログンの身体

サイバースペースを生きるもの

思考と身体

アナログン

可能性？

3 サイボーグの身体と思考

サイボーグの身体

アナグラムとデペイズマン

重層と分裂

4 身体からの逃走

「義体」

自壊と脱出・逃走、(サイボーグの身体：《イノセンス》DVD ジャケット)

5 身体への残留(?)

自傷、(身体を劈いて横たわる人：松井冬子《浄相の持続》)

III 松井冬子と「松井冬子」イメージと作品

1 松井冬子

日本画家・松井冬子

2 「松井冬子」イメージ

「松井冬子」イメージの発信

女性と雌

心理学と精神分析

美術解剖学

イメージの定着

イメージの戦略

マイナーであること

「松井冬子」を演じる松井冬子

3 欲望・消費のスペクタクル？／本人をうつす「セルフ・ポートレート」？

松井冬子と「松井冬子」の「見せる」ものと「見せない」もの

「見せない」まま「見えない」もの

作品再考、「セルフ・ポートレート」として

IV 松井冬子の作品、描かれているもの

1 図、何が描かれているか

「松井冬子」イメージに被われた作品、作品は「セルフ・ポートレート」か？

「松井冬子」と松井冬子が描くもの、戦略？吐露？

描かれた人物の顔

2 浮かび上がるものと沈み込むもの

顔とマスク

「顔貌性」

顔として露出する内臓

滑らかな皮膚に囲まれた身体と絡みつく肉のドレス

3 可逆性と反転

顔と目、「見る」／「見せられる」「見させられる」、「見られる」／「見せる」の往還

「見える」ものの反転

4 逃れ去るもの（その結果不在のもの）

「顔」

非顔の羅生・質を湛える地

図と地、「見せる」／「見せない」の重層、意図された構造／意図されざる構造

「見せない」もの・「見えない」もの・「ない」ものがあらわれる？

V 石内都の作品、「見えない」もの・「ない」ものをあらわす

1 作品としての「あらわれる」こと

「時の器」

(副論3. 「イメージ」)

石内都と肖像としての作品

2 同級生、もう一人の「わたし」

《1・9・4・7》

《1・9・4・7-faces》、顔と日付

顔の(再)登場

3 母、一続きの「わたしーたち」

《Mother's》

はじまりの写真と「遺品」

「石内都」の構造

自分ー非自分、自分の中の他者ー他者の中の自分

(副論4. A. リンギスによる他者)

4 ノイズの作品

内なるノイズ

関係性の作品、「見えない」ものを見えないままあらかわす

* 副論3. 「イメージ」

作品の成立

「イメージ」

「イメージ」という言葉

もとのものと「イメージ」

作品の「イメージ」、「見る」人と作品自体

「見る」人の能動性あるいは受動性

作品の物質性

普遍性と固有性

「イメージ」と「影」

* 副論4. A. リンギスによる他者

「ノイズ」としての他者、他者の位相

人であること、個人であること、「私」であること

他者との出会い

命法・命令と尊敬

命法・命令から生じる苦痛

「私」ではないわたしー無区別のわたし

「わたしたちは」と語る（「わたしたち」として語る）

「わたしは」と語る（「わたし」として語る）

声、他者の声を聞く（他者の声に触れる）

VI「セルフ・ポートレート」の中で

1 作品の中で

作品の中にあるもの

不純物の混入

不可能な純化

純粹な「セルフ・ポートレート」

「セルフ・ポートレート」にあるべきもの、「セルフ・ポートレート」の核

2 不純物、passions、他者

「セルフ・ポートレート」の不純物

不純物への注目

感覚・感情

passions としての感覚・感情

3 passions

逃れ去る passions

変化・動きそのものである passions

他者である passions

4 自分と他者、自分「イメージ」の生成

自分と他者の逆説、他者に依存する自分

迫りくる passions、「アレゴリー」化の試み

（副論5. 「イメージ」と「アレゴリー」）

「セルフ・ポートレート」における passions の表現

「わからない」「見えない」「ない」ものとしての passions

あり得ない自分、見知らぬ自分

不純物ー「ノイズ」

* 副論5. 「イメージ」と「アレゴリー」

「アレゴリー」

感覚と表現コードの組み換え、目への「アレゴリー」

「セルフ・ポートレート」における「像イメージ」の「アレゴリー」

VII松井冬子の作品、どのように描かれるかの礎

1 普遍性と個別性、変化するものの表現

身体と感覚・感情の表現における普遍性と個別性、両立？

絵の中の感覚・感情と変化・経時の表現

普遍的表現の志向

表現という図式化

2 イメージの万華鏡

自傷や幽霊というスペクタクル、キツチュ（？）

シミュレーション、アプロプリエーション、イメージの編集

ダ・ヴィンチへの憧憬とイメージの源流

西洋古典絵画から

3 ダ・ヴィンチという北極星

出発点としてのダ・ヴィンチ

観察と美術解剖学

空気の厚み、空間

輪郭線と微細な線の集積

4 ダ・ヴィンチへの別の道、独自性・特異性

線を残す

画面に施される線

何も描かれていない部分、背景・地

「何が描かれているか」から「どのように描かれているか」へ

VIII 松井冬子の作品、どのように描かれるか技法と特異性

1 絹本に薄塗り、裏彩色、裏箔

絹目に触れる

空気の中に置かれる線、基底材の空間

2次元（平面、表裏）の超越、古典技法の再構成

2 空間感、日本画と西洋画の隔たりの上に

日本画と西洋画の空間

空間の裂け目

曖昧な空間

空間の複合

3 線描

細密描写、視覚と触覚

「見る」と「触れる」

「触れる」ことで生まれる線

痕跡としての線

線の堆積

線の増殖

「フェルト化する線」と「エッジの効いた線」

Ⅸ松井冬子の作品、あらわれるもの、「ある」と「ない」の間

1 「ある」と「ない」の間

「ある」と「ない」の間

「極薄の」

形のないもの、「見えない・わからない・ない」もの

「見える」ものと「見えない」ものの「ノイズ」

2 「イメージ」を描く

平衡感覚の停止・無重力

曖昧さ、曖昧さをあらわす

幽霊

「ない」はずのものが「ある」ということを描く、コードの交替

3 質感と「イメージ」

passions の襲来、外側・内側

図と地の反転、質の転換

複合・生成する「イメージ」

融合・生起する感覚・感情、感覚・感情と「イメージ」の連鎖

4 「セルフ・ポートレート」である証し

ふたつの線と「痛み」としての passions

唯一絶対の自分、摂食障害とアレルギー

線の並立

X「イメージ」としての「影」、「影」の触・視

1 触視と描出

形と色

形の「イメージ」と質の「イメージ」

触覚としての描線、光と空気を紡ぐ

触視の軌跡

2 「影」

光－陰

「影」の中の光と陰、光陰の綾

「影」としての「イメージ」

3 自分を託す、身代り、アバター

「影」と「身代り」

「厄払い」、その成立と前提としての自分であると見なすこと・直観

自分をうつすものとしての「セルフ・ポートレート」「影」「身代り」「分身」と「アバター」

別のもの同士が同じであること

「セルフ・ポートレート」という痕跡

4 別様にあること

「像イメージ」を「アレゴリー」として

(副論6. 不可知の彼方から、「わからない」ものが呼びかけてくる)

「影イメージ」の中に融け込む

動き・変化

生きていることと生きたことの証し

生成する自分と自分の「影イメージ」

流動的・不定形で未完成な自分への肯定

生を取り戻すこと、理想と規範の拘束・「一なければなりません」からの解放

* 副論6. 不可知の彼方から、「わからない」ものが呼びかけてくる

「イメージ」の連続性と総合

不可知

有限性

不完全さ・曖昧さを享受する

蝕になる別のもの

「ない」はずのものの呼びかけ

エピローグ：「セルフ・ポートレート」これから・これからも、(展望)

「セルフ・ポートレート」であること

「セルフ・ポートレート」を穿つ

自分という他者の他者、他者の作品

他者の作品としての松井冬子が描くもの、絵画表現における他者

他者のあらわれ

「エッジの効いた線」と「フェルト化する線」再考

呼びかける努力

誤解を恐れない勇氣

生とともに

【参考文献、資料】

【図版】

「セルフ・ポートレート」の可能性について
——「自己」「像」「同一性」とは別様の、松井冬子の作品を例に

遠山いずみ

論文の要約

原点と問い

今生活の中にある「セルフ・ポートレート」¹⁾を眺めると、社会的な機能や目的を持たず、戯れのように見え完全に私的な、いわゆる“「アイデンティティ」としての「セルフ・ポートレート」”が目につき、氾濫しているとも見える。

実際それらは、「同一性（アイデンティティ）」に根差すことなく、「自己（セルフ）」をあらわさず、「像・肖像（ポートレート）」ですらないこともある。そのため、従来の基準からは、無秩序で不快にうつる。

しかし、それら「セルフ・ポートレート」らしからぬものは、単に新奇性において消費され、または逸脱を矯正され不可能なら一掃され、あるいは最初から一絡げに無意味として無視されるべきなのだろうか。

ねらいと手がかり

百花繚乱、次々とあらわれる現代の「セルフ・ポートレート」は、単に欲望・消費のシステムの中の徒花でなく、人にとって欠くことができず、自分が自分であること・自分になることを支えることを検証する。

そのために、以下の手がかりから、自分と自分であることを喚起する「セルフ・ポートレート」があらわれる過程を透写する。そして、既成の基準とは違ったあり方を浮かび上がらせ、自分の生に寄り添い自分と生を肯定するものとして捉え直す。

具体的な事例、松井冬子の作品

“「痛覚」を現実的自己確認の手段とする”と作者が語り、見るからに「自傷」と「痛み」また「幽霊」のような印象を与え、スペクタクルとして欲望・消費に尽きるかに見える松井冬子の作品を主な例に取り、具体的に吟味することを基に考察を進める。

「イメージ」²⁾

石内都の作品を糸口に、人が感受するのは、視覚のみならず多様な感覚が複合し生成する「イメージ」であることを確認する。また「イメージ」が、同一性よりもむしろ類似性によってもとのものと結びつき、それに代わることを押さえる。

動きと変化（生きている人間・生きていることを基本に）

自—他の区別により自分は生起し、その境界に「セルフ・ポートレート」があらわれ

る。人が生きて動く限り界面は常に変化し、ゆえに自分の輪郭は閉じ得ない。一方、「見える」形象に固まった「セルフ・ポートレート」は、自分の脱殻・痕跡といえる。

A. リングスのいう「他者」「ノイズ」「passions」

自－他において自分が喚起されることを、リングスのいう、何か「わからない」ものとしての「他者」やその標としての「ノイズ」、また自分の中に湧き立つ制御不可能な激情・「passions」を援用して整理する。

松井の作品では、執拗に施される微細な線を「他者」、「自傷」や「痛み」を「passions」とすれば、上のキーワードは絵にあらわれるものを捉え直す補助線となる。

図式的かつ乱暴にいえば、この論考では、松井冬子の作品を例に、一見「セルフ・ポートレート」らしからぬ「セルフ・ポートレート」であったとしても、そこに生起する「イメージ」と自分自身を結びつけ自分を託すことができるなら、生きている自分に根差す「セルフ・ポートレート」であり得ることを検証する。そして、そのような多様性を認める立場こそが、停滞感や不安感漂う現状に新たな方向を見出すためには、肝要となることを述べる。その際、自分が自－他の区別と並立においてつくられることを確認し、作品に自分であることの標や自分が自分になっていく軌跡が残される様を、リングスのキーワードを参照しつつ精査する。

過程

I

人に課せられた「自己」と「像・肖像」と「同一性」の重なりを問題の原点とし、考察すべき領域を確認する。

J. ボードリヤールが展開した論（『消費社会の神話と構造』）の欲望・消費システムでは「個性化」に至る手前もしくは志向の根底、かつ、J.L. ナンシーの肖像と主体に関する考察（『肖像の眼差し』）で「自律的肖像」を語ることで暗黙裡に示されたいわば「非自律的肖像」、すなわち両者が言明を避けた領域を考察すべき方向と想定する。

II

「セルフ・ポートレート」と自分および自分の身体がどのような位相にあるかを窺う。科学への信頼を錦の御旗としてテクノ・サイエンスが席卷する現代、思考と身体を分け身体を使い棄てながら存在を繋ぐ電腦とサイボーグの戦略は、究極の存在モデルはある。だが、人間にとって自分の身体は、必ずしもサイボーグモデルのようにならないことが、松井冬子の「セルフ・ポートレート」的な作品から垣間見られる。

III

松井冬子の作品を概観し、「セルフ・ポートレート」の例とすることの是非を検討する。

松井の作品は、「トラウマ絵画」として画中の人物が作者であると見られがちだが、プ

ロモーションの戦略と相まって極めてスペクタクル的で、現代社会特有の状況・問題が凝縮している。だが判断には、何より作品自体を見なければならない。

IV

松井の作品に「何が描かれているのか」、またいかに「セルフ・ポートレート」的なのか／でないのかを観察する。

松井の作品は、見方を転じると、意外な相が展開していく。既成の基準で、つまり絵の図・像など目で瞬時に「見える」ものに囚われている限り、深層にあるものや全体の本質を取り逃がしてしまう。見逃されてきた部分に目を遣り、「何が描かれているか」だけでなく「どのように描かれているか」によって捉える立場が導き出される。

V

石内都の作品を基に、「見えない」ものがあらわれる／あらわすということを把握する。

人は、造形作品にも、目に「見える」ものだけでなく、「見えない」ものを感受する。作品が喚起する様々な感覚や記憶を介し、視覚的な「イメージ」のみならず、複合的な「イメージ」が場所や時間を越えてあらわれるのだ。石内は「イメージ」を現実に導き出し、作品はそれらが展開するスペースとなっている。

VI

作品にあらわれる「イメージ」を作品に向かう人³⁾が感受する過程を整理する。

「イメージ」は、意味不明・理解不能なものを含み、視覚だけでなく多様な感覚によって不意に到来する。それらは排除されるべき不純物、制御されるべき激情 (passions) として、その人の完全な受動 (passion) のうちにあらわれる。リングスが語る通り、本人の意志やコントロールが及ばない「他者」に襲来されるのだ。

VII

松井の作品に「イメージ」をもたらす表現の礎、制作・技法や意図・着想の源流を辿る。

作品には日本画の伝統技法と西洋画のオーソドックスな表現が駆使され、ルネサンス以降の観察に基づく事実と普遍性が志向されている。松井はダ・ヴィンチに憧憬し、科学的・解剖学的視点や細密描写などの方法に倣う一方で、輪郭線を排除する技法⁴⁾は採用せず、日本画の伝統を考慮しても、線と線描に強い拘りを持っているのが窺える。

VIII

作品が「どのように描かれているか」、絹本に薄塗り・空間感・描線を中心に吟味する。

「何が描かれているか」から「どのように描かれているか」に見方を転じる。絵の図から逃れ全体に眼差しを這わせると、絹目と岩絵の具の細粒が空気を孕み現実と非現実が編み込まれたような空間を、形未満の無数の描線がつくっているのが知れる。

IX

画中に展開する「イメージ」が、本人⁵⁾とどのように結びついているかを考察する。

視覚に特化した「イメージ」を「像イメージ」、それ以外・複合的な「イメージ」を「影

イメージ」とすると、後者は、視覚優越の下で無化される「見えない」ものから発し作品の底に沈む。リングスのいう違和感を醸す「他者」であり、突然到来・襲来し「触れて」きて自分を強く喚起する。松井のいう「自傷」と「痛み」は、この自－他のせめぎ合いと自分の中の非自分・制御できない感情（「passions」）と考えられる。

X

「セルフ・ポートレート」が自らを託し得るものとなるような結びつきをトレースし、「影イメージ」の受容が変化と動きを認め生の肯定に至ることを展望する。

「影イメージ」としての「セルフ・ポートレート」は、類似の関係で本人と結ばれ、「身代り・分身」となる。自分をうつし託すことができ、現代の「アバター」としても成立する。さらに、石化した視覚世界から生気に満ちた世界に人を戻す。

結論と展望

新奇で多様な「セルフ・ポートレート」も、既成のものと同様、自分の存在を立ち上げうつすものとあらためて捉えることができる。ただ、近代に案出された「セルフ」を、自分を固定したプレパラートである「ポートレート」に、「アイデンティティ」として一致させるのではない。端緒は「影」のあり様に求め得る。それは自－他や視覚－複合的な感覚の曖昧さや還流を受け容れる。科学的同一性に拘らず、類似性の関係に沿う。

このような関係性は、近代以降軽視されてきたとはいえ以前から存在したが、単なる再帰とは異なる。まず、視覚の優先と同一性原理の下で「像イメージ」への一致や、理想・普遍など現実に達し得ない基準から人間を解き放つ。何より、他なるものの存在に気づき、基準の複数性を許し、通常は無視されるものに現状の閉塞を破る可能性を探るのだ。また、「－なければなりません」という義務と拘束から「－なくてもいいです」という自由と許容へのシフトでもある。多様性や特異性の尊重は、差異と変化を本性とする人間とその生の肯定に繋がるだろう。

【注】

- 1) ここでは、それに自分を託し自分が自分であることを確認・呈示することができるものと捉える
- 2) この論考では、後に「他者 (others)」「ノイズ (noise)」「passions」など A.リングスのキーワードおよび考察を参照するため、言葉の相関性を共有する英語の「image」を基に、リングスが用いたように日常的・一般的な用法において使う
- 3) 鑑賞者および作者、作品に向かうことで開示されるスペースに立つ人
- 4) スフマートと呼ばれる技法、ダ・ヴィンチの考案とされる
- 5) 「イメージ」を抱く本人、作品に向かう人、鑑賞者および作者